

高橋香里「もったいないうつのみや運動～行政に求められる環境政策とは～」

はじめに

今、地球上ではさまざまな環境破壊が深刻な問題となっている。地球温暖化、森林の減少と砂漠化、資源の枯渇、海や河川の汚染など、それらの問題のほとんどが私たち人間の活動によって生じているものである。人間は便利で豊かな生活を求め発展していく一方で、かけがえのない地球を痛めつけ、人類を含めた全生物の存続すら危ういものにしていく。今を生きる私たちは、ただ豊かな生活を求めるだけではもはや生きていけない。業者や行政に限らず、私たち一人ひとりが環境に配慮した行動を求められている。では私たちが環境のためにできることは何なのか。いわゆるエコライフを送ったり、積極的に植林のような環境保全活動に参加したり、勉強して環境問題について理解を深めるなど、方法は様々である。そうした行動を私たちが自発的に行うことももちろん必要であるが、行政によってそれを啓発していくことも重要であろう。また行政自体が見本となるような環境活動をしていくことも必要である。私は市や県などの地方行政による環境政策に関心を持ち、今まで調査をしてきたが、その中でも特に印象深かったのが宇都宮市の「もったいない運動」である。行政による環境政策というと行政主体で市民に浸透しにくいものも多いが、この宇都宮市の運動は市民にとって分かりやすく親しみやすいというところに特徴がある。行政と市民が共に協力して環境活動を行うことが求められている今、こういった運動には重大な意義があると思われる。行政にも市民にも、環境破壊の現状を無視することは許されないのである。

1. 「もったいない」をキーワードにした環境政策

「もったいない」という言葉は、元来「ものの値打ちが生かされず無駄になるのが惜しい」という意味で用いられる。これを環境政策のキーワードとして注目したのは、環境分野で初のノーベル平和賞を受賞したケニア人女性、ワンガリ・マータイさんである。マータイさんは2005年の来日でもったいないという日本語に感銘を受けた。マータイさんいわく、Reduce（ゴミ削減）、Reuse（再利用）、Recycle（再資源化）という環境活動の3Rをたった一言で表せるだけでなく、かけがえのない地球に対するRespect（尊敬の念）が込められている言葉が「もったいない」なのである。マータイさんはこの美しい日本語を、環境を守る世界共通語「MOTTAINAI」として広めることを提唱した¹。その後日本国内でもこの「もったいない」という言葉の再認識が広まり、一躍話題となった。もったいないをテーマにした環境活動は、民間や行政などによって今でも各地で行われている。宇都宮市のもったいない運動もそのうちの一つである。

2. もったいないうつのみや運動

宇都宮市が平成17年度から始めているもったいない運動は、大きく二つの種類に分けられる。一つ目は“宇都宮に来てくれた人に宇都宮のよさが伝わらないなんてもったいない”という意味の「もったいないおもてなし運動」であり、これは観光事業の一環である。もうひとつは今回私がテーマとして取り上げた、環境の視点からの「もったいないうつのみや」運動である。この「もったいないうつのみや運動」は、身近で親しみやすい「もっ

たいたい」という言葉をキーワードとして、3R（リデュース、リユース、リサイクル）や地球温暖化防止対策を推進していくことを目的としている。具体的な政策としては、ごみ減量キャンペーンや省エネ家電普及キャンペーンを行ったり、粗大ごみの再生販売をしたり、もったいないアイデアや川柳を市民から募集するといったことを行っているⁱⁱ。

宇都宮市ではもったいない運動を始める以前から、地球温暖化などの環境問題に対応して行政事業計画などを推進していた。しかし市民に分かりにくく浸透しなかったという問題から、「もったいない」という馴染み深い言葉をキーワードにした市民に分かりやすい環境政策を開始した。今ではもったいない全国大会を宇都宮で開催したりと、もったいない運動の規模は拡大しつつあるが、どれくらいそれが市民に広まりどれくらいの実質的効果が出ているのかは、数値として表すことはできないので分からないらしい。また便利なものを好む時代、もったいないという意識を市民全体に啓発していくことは決して容易ではない。行政だけでなく、企業や民間団体も協力して、もったいない運動を積極的に広めていくことが重要となっているⁱⁱⁱ。

3. もったいない全国大会 in 宇都宮

前述した通り、宇都宮市では年に一回もったいない全国大会が行われている。もったいない全国大会とは、環境に関連のあるゲストを呼んで講演をしてもらったり、環境政策に成功した企業や団体の事例発表会を行ったりし、もったいないをキーワードに環境について考え、交流を深めようという場である。これは行政によってのみ行われるものではなく、数十もの団体からなるもったいない全国大会実行委員というものが存在し、それが運営を行っている。今までに計二回行われ、第一回目は2007年8月に開催され2300人もの来場者を集めた。今回6月2日、3日に第二回もったいない全国大会が宇都宮総合文化センターにて行われ、私も足を運んできた。初日の6月2日はもったいないを世界に広めたマータイさんや、元環境相の小池百合子さんらをゲストとして呼び、講演を行った。二日目は地方自治体やNPOなどの環境政策の事例発表会で、私はこちらの二日目の方だけに参加してきた。それに関する感想や実態報告を述べていきたいと思う。

大会初日はホール満杯で、ホールに入りきれない人は別室のモニターで大会に参加するというほどの盛況ぶりであったらしい。それに比べ大会二日目は、ホールの席の空きも多く、全体の席の6割程度が埋まっているという状態であった。このように初日と二日目で来場者に差が出る理由として考えられるのは、初日はマータイさんなど豪華ゲスト(有名人)が来るのに対し、二日目は特にゲストが来るわけでもなく事例発表会という一般市民の関心を集めにくいということであろう。私個人としては環境問題にとっても関心があるので、事例発表会はとても興味深いものであった。事例発表会に参加したのは、株式会社島津製作所、NPO法人スペースふう、岡山市、茨城県立土浦湖北高等学校の五つである。各団体の代表者数名が、パワーポイントを使いながら自分達がどんな取り組みをしているのか分かりやすく説明してくれた。すべては紹介しきれないので、その中でも特に私の中で印象深い発表だった「NPO法人スペースふう」について説明を加えたいと思う。スペースふうとは山梨県増穂町の女性達が立ち上げたNPOの法人団体である。この団体は、イベントの際排出される大量の使い捨て容器のごみ問題を何とか解決したいという思いから、2003年にリユース食器のレンタル事業を起こした。今では全国に七ヶ所の拠点事業所を置き、それらを結ぶ「リユース食器ふうネット」を2006年に設立した。いまや「使い捨て食器NO!」のうねりは全国に広がりつつある^{iv}。スペースふうの代表の方が活動を始める経緯や今に至る苦労を、分かりやすくも感情を込めながら熱弁してくれた。数人の女性で

開始した事業がここまで発展した背景には、女性達の努力と熱意があるのだと感心し、頭が下がる思いがした。

各団体の発表が終わったあとは毎回質疑応答の時間が設けられるのだが、そこで気付いたのは県外から来ている人も多いということであった。わざわざ遠くから関心を持ってきてくれる人もいるのだから、宇都宮市民ももっとこの大会に誇りを持って積極的に参加してほしいと思った。ほかに印象深かったことは、出入り口のロビーの状況である。もったいない全国大会実行委員会の人がたくさん並び、宇都宮市役所環境政策課の方もいらしていた。LRTの宣伝も模型まで展示して行っており、全国大会に対する熱の入り具合が伝わってきた。帰り際には無料でエコバックをプレゼントしてくれ、とても有意義な時間であった。

もったいない全国大会の改善点として感じられたのは、まず大会を実施する日にちである。平日ではなく休日に行えば事例発表会の来場者も増えただろうし、学校のある学生も参加しやすいであろう。もったいない全国大会に参加することはとても有効な環境教育となる。色々都合があり平日に行っているのだろうが、できれば改善して欲しい点である。それから初日と二日目の来場者の差をなくすために、呼ぶゲストを初日と二日目で分けてみてはどうだろうか。事例発表会も初日に劣らないくらい素晴らしいものである。ゲスト目当てで来た人も、事例発表会を見れば環境問題への関心が深まるはずである。そして最後に改善して欲しいことは、もったいない大会で宇都宮のエコ活動をもっとアピールすることである。宇都宮が十分な環境活動を行っているとはいえないが、せっかく県外から来る人も多いのだから宇都宮のイメージを良くするためにも環境に配慮した大会にすべきである。たとえば、6月3日の大会の日は雨が降っていたのだが、傘を入れるために用意されていたビニール袋が、私は純粹に「もったいないなあ」と思ってしまった。あとはせっかく環境に関心のある人が集まるのだから、環境募金の箱を目立つ場所に用意するとか、もっとあの大会の場を有効に使うことが必要だと思う。いまの状況で妥協せずに、大会を今後よりよいものにしてほしい。

4. 宇都宮市以外のもったいない運動

もったいない運動を行政事業として行っているのは宇都宮市だけではない。もったいない事業を環境政策として推進している地方自治体は、千葉県松戸市、岡山市、静岡県藤枝市、静岡市、和歌山県かつらぎ町、福島県、岐阜県など例を挙げればきりがなほど全国にたくさんある。

宇都宮市以外の代表例として、千葉県松戸市を取り上げたい。松戸市では、「もったいない精神」が環境をはじめ、教育、福祉など、あらゆる行政分野の基本になるものと考え、「もったいない運動『ワンス モア』」をスローガンに全庁的にこの運動に取り組んでいる。マータイさんの当市への訪問もあって、「もったいない運動」はますます市民への広がりを見せ、今では500を超える協賛団体の中から有志が集い、「もったいない運動推進市民会議」が立ち上がった。松戸市では、「市民会議」との連携を図り、ともに考え、「ひとものしぜんをたいせつにするまち まつど」をコンセプトとし、市民と行政が一体となって「もったいない運動」を推進している。去年の第一回もったいない全国大会では、松戸市も事例発表会に参加した。

他にも市や県によって運動の仕方は様々でありそれぞれの特色がある。それにしても、これだけもったいないを推進する市や県があるのだから、「もったいない地方自治体ネッ

トワーク」のようなものを作り、お互いにアイデアや知識を共有しながら進めていけば、もったいない運動の効果は高まるのではないか。そのようにすればもったいない運動をしていない市や県にも意識を啓発することができる。今、もったいない運動の展開が求められる時にきているのだと思う。

おわりに

今回宇都宮や他の市などのもったいない運動について調べ、全国大会にも参加してみて、今のうつつのみやもったいない運動に足りない点を痛感すると同時に、今後の運動の展開に大きな期待を感じた。

果たして宇都宮市のもったいない運動は全市民に広まっているのだろうか。まだそうとはいえないのが現状であると思う。宇都宮市のもったいない運動は市民が自発的に行わなければならないものが多いため、もっと市民の意識を啓発しやすく運動に参加しやすい形が求められると思う。たとえばリサイクル販売を頻繁に市民に身近なところで行ったり、もったいない運動の推進に貢献している企業や団体を表彰したりと、市民に何かしらの利点を与えれば、もったいない運動は更なる広がりを見せることだろう。

確かにもったいない運動は効果が目に見える環境活動ではないかもしれない。しかし人々の意識を変えるきっかけともなる素晴らしい活動だと私は思う。それにそうした意識改革が、いつか実質的な効果を生んでいくのであろう。地球温暖化といった環境問題はもはや無視できるものではない。もったいないという日本独特の言葉をテーマに対策を行うことは、環境問題を解決する糸口となるだけでなく、私たち日本人の民族性を発揮することもできるであろう。

私はもったいない運動をはじめた宇都宮市を誇りに思う。だからこそ、全国の見本となるようなもったいない運動を今後展開して行ってほしい。

i参考：MOTTAINAI ホームページ「MOTTAINAI とは」

<http://www.mottainai.info/about/>

ii 参考 HP：宇都宮市役所 HP「うつのみやもったいない運動」

<http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/kankyo/mottainai/432/mottainaitorikumi1.html>

iii 2008年5月15日 宇都宮市役所環境政策課 手塚氏からのインタビューによる

iv 第二回もったいない全国大会「事例発表会」資料（2008. 6. 3）PP.29よりまとめた

v 参考資料：第一回もったいない全国大会資料 P.9 事例発表会よりまとめた